

わたしの原風景

1

西村繁男

にしむら しげお／絵本作家



私を剥いでいけば、少年時代の私が確かに今もあって、老人になればなおさらこの少年時代が顔をもたててくる。そして懐かしさを感じるより、それが私の資質そのものを形作ったのだと再確認することになる。私は団塊の世代で、昭和三十年代が少年時代である。戦争が終わり日本が高度成長に向かった時期だ。舗装されていない土の道があり、あちこちに原っぱがあった。物は豊かではなかったけれど、まだ管理されない大らかで自由な空気があった。

私の故郷は高知である。小学校のクラスの集合写真を見れば、私の顔はお盆のように真ん丸である。太陽が眩しくていつも顔をしかめている。背は小さく一番前が二番目であった。他の子より幼くぽやっとしていたようだ。絵を描くことは好きだったけれど、運動や遊びは下手だった。それでもぽやっとしていたから、思春期を迎えるまで自分の下手なことすら気にならず過ごした。

私の家は高知市内を流れる鏡川の堤の上にあった。川と川原、川辺の畑と対岸の田んぼは格好の遊び場だった。釣りも下手で上手く釣れずにいた時、いじめっ子がやってきて竿を取り上げられたことがあった。いじめっ子は、次々魚を釣り上げ、ジャバジャバと川に戻して行ってしまった。それ以来、私は金網製のフツタイという道具で魚を捕ることに夢中になった。捕ってきた魚はバケツで飼うのだが翌朝にはいつも死んでいた。酸素が足りないことに頭が回らず、同じことを何度も繰り返した。泳げるようになったのも遅くて、魚を捕りに行って、頭を水につけ足を上げて力を抜いたらまたま浮いたのだった。セミや蝶など虫取りも上手とは言えないけれどよくやった。田んぼでは強がって蛇を振り回したりもした。自然以外では少年漫画雑誌と東映のチャンバラ映画があった。杉浦茂さんの漫画に出てくる雲は私の絵本にも出てくる。

そこには大人にあまり干渉されない子どもだけの世界があった。そんな時代に少年時代を送れたのは幸せであったとしみじみ思う。